

インタビュー

一般廃棄物・産業廃棄物の総合処理・資源化を進める勝田環境（茨城県ひたちなか市）は今年創業65年を迎える。今秋までには第2焼却炉が営業を開始。第1焼却炉と合わせて1日当たり処理能力が300トンとなる。昨年7月、新社長に就任した望月徹男氏は三代目。持続可能な未来と社業の発展へ、熱と力あふれる挑戦を始めている。

——事業承継を意識し 経営者になろうと勢いたのはいつごろ。 込んでいたのです。望月 物心つく頃ですね。「何かから手を付けね。長男でしたから、ていいかわからない」（後を）継がなきゃなと青木環境事業でお世らないという感じはあ話になった古川さんりました。21歳から、（故人）にこぼすと、青木環境事業（新潟県「まだ20代なのに40代新潟市）さんへ働きたみたいなことを考える出ました。最初は不安な、「いまに集中しろ」で、自分でできるんだと言われました。気持ちろうかかと悩んでばかりにゆとりがで、前り。自分なりに完璧なを向けるようになったま

社員の成長を後押し

勝田環境 代表取締役社長 望月徹男氏に聞く



——した。今でも忘れていません。望月 1961年勝田環境衛生事業として創業。90年代に産業廃棄物の焼却事業に参入し、その後、バイオマスの発電など事業を拡大しました。サーマルリサイクルのみならず、マテリアルサイクルにも取り組みました。資本金は3000万円、年商は37億円、従業員は152人です。——今後の抱負を。 望月 常日頃社員に言っていることは、これまでと同じやり方では通用しないということです。たとえば有給休暇の取得率の改善は当社にとって難しい課題です。かつては仕事優先、社員の休みは後回しでした。でも、これからは仕事があっても社員を休ませなければいけない時代になりました。福利厚生などいろいろな分野でもベースアップして、子育てや親の介護をしながらでも働けるようにしなければ優秀な人材がいなくなってしまう。誰もが公正公平に評価される人事制度の構築も真剣に考えています。

——いくら工場が立派でも、それを生かすのは人です。社員一人一人の成長が大事。それを後押ししていきます。 望月 将来、定年を迎えた社員が、「ここで働いてきてよかった」と言える会社にすることが私の夢です。 ——ありがとうございます。

——御社の沿革を。 望月 常日頃社員に言っていることは、これまでと同じやり方では通用しないということです。たとえば有給休暇の取得率の改善は当社にとって難しい課題です。かつては仕事優先、社員の休みは後回しでした。でも、